

影山先生と牧野先生へのラブレター

国文学科主任 山内博之

影山輝國先生と牧野和夫先生が、今年度末で定年を迎え、大学を去られる。ほんの二年前に栗原先生が退職なさったばかりなのに、今度は影山先生と牧野先生が国文学科を離れてしまう。残された者としては、寂しくて仕方がない。

私は、平成十二年四月にこの大学に着任したが、影山先生との出会いは、それよりも数カ月遡る。その頃、私は岡山大学文学部の専任講師であったが、本学の国文学科が私を採用するに当たり、当時文学部長であった栗原先生と国文学科主任であった影山先生が、わざわざ岡山大学の私の研究室までご挨拶に来てくださった。まだ三十代だった私にとって、文学部長と国文学科主任がわざわざ岡山までご挨拶にいらしてくださるなどということは、とてもとても恐れ多く、大変緊張したが、お二人とも、まるで旧知の友

人を訪ねるかのように気さくで、終始にこやかにお話をしてくださったことを、今でも、昨日のこのように、はつきりと覚えていいる。最初に見たものを親だと思う「刷り込み」ではないが、私にとっての「国文学科主任」は、いつになっても影山先生である。

影山先生とは、何度か海外にもご一緒させていただいた。影山先生が国際交流センター長をなさっていた時には、主に協定校を訪問するために中国、韓国にご一緒させていただいた。また、国文学専攻の大学院生たちを中国の曲阜師範大学に連れて行ったこともある。曲阜師範大学のみならず、我々を歓迎するために食事を開いてくださったのだが、その席で、影山先生は、大学院生たちと一緒に中国の国歌を中国語で披露されていた。曲阜師範大学を訪問

するに当たり、大学院生たちに前もって中国語の指導をなさっていたのである。「次は、君が何か歌いなさい。」と影山先生に言われ、何も準備がなかった私は、仕方なく「お魚くわえたドラ猫……」で始まる「サザエさん」のテーマソングを歌い、本当に恥ずかしかったが、それも、今ではいい思い出である。ちなみに、中国の大学の式典等で、影山先生が中国語でスピーチをなさっているのを何度かお聞きしたことがあるが、本当にカッコよかった。私も外国語を習得したいと心から思った。影山先生は、私の永遠の憧れである。

牧野先生には、いつも褒めていただいていたばかりいた。「山内さんが実践に来てくれたから、何とか今でも国文学科がやっつけてるんだよ……」と一体何度言われたことか。私が気持ちよく働けるようにという、牧野先生ならではのお気遣いだったと思うが、しかし、それでも、少しぐらいは本当にそう思ったださっていたのかもしれない。また、牧野先生は、「体育会国文学科」の先輩としても、とても親しく接してくださった。何年前か前、私が一度目の主任の職についていた時、腰痛がひどくて、二百メートルぐらいしか続けて歩けないような状態だったのだが、学科の教員たちにはそれを知られたくなく、黙っていた。しかし、牧野先生にだけは腰痛のことを相談した。「ああ、それは

ちょっとかかるね。でも、半年ぐらいで治るよ。」と（医者でもないのに）おっしゃり、実際そのとおりになった。

しかし、牧野先生と言え「論文」である。（少しミステリアスに書けば）執筆した論文数は二百とも三百とも言われるが、その実体は定かではない。この号に掲載されているであろう研究業績一覧が楽しみである。研究については、日本語教育が専門である私を、言語全般が見渡せるよう、導いてくださっていたように思う。英語を話せば褒められ、スペイン語も少しできると言えばまた褒められ、調子に乗りやすい私は、日本語教育という窓から言語研究をも眺めてみたいと思うようになった。十数年前、日本語教授法の本を出版した時に、当時主任だった牧野先生に、学科研究室に呼び出された。「このような本も価値のあるものとして認めるけど、でも、まあ、こういう本だったら二年に一冊は書かなきゃダメだね。」これが、牧野先生からの「激励」の言葉であった。牧野先生がご自分の研究室に戻られた後、この会話を聞いていた当時の森篤嗣助手（今で言う助教）が「牧野先生に怒られましたね！」とニコニコしながら言っていたのを懐かしく思い出す。

本当に大恩あるお二人である。つい、お二人についての個人的な思いばかりを述べてしまったが、学界・学会に対するお二人の貢献は、今さらここで述べる必要もないだろ

うし、また、私などにはそれを語る資格もない。そんなお二人がいなくなってしまうのは、本当に寂しい。

宴会などの終了時に、よく「中締め」と言うが、気分はまさに「中締め」である。これで終わりではない。

影山先生、牧野先生、これからも国文学科を見守り、少しでも良い方向に導いていってください。とりあえず、これで「中締め」といたしますが、今後とも、どうか、国文学科をよろしくお願いいたします。